E-16　（個人発表　6 月 13 日(日)16:00～16:25　N313 教室）

アラスカ先住民イヌピアックの捕鯨祭り[アプガウティ]と食物分配

アラスカ州バロー村の事例

岸上伸啓（国立民族学博物館および総合研究大学院大学）

アメリカ合衆国アラスカ州北西部に住む先住民イヌピアックは、多額の現金を投入し、装備を整え、ガソリンなどを購入しながら、ホッキョククジラの捕獲に従事している。彼らはクジラの肉や脂皮を販売することはなく、自家消費するとともに、さまざまな機会に無償でほかの人々に分配しており、捕鯨とその獲物の分配を彼らの生き方と密接に関係するもっとも重要な生業活動であると考えている。

報告者は、彼らの捕鯨活動の社会的、政治的、経済的、文化的、栄養学的な意義や、獲物であるクジラの肉や脂皮の分配と流通についてアラスカ州バロー村において2006 年より現地調査を実施してきた。同村では、春季と秋季に近くの海域を回遊するホッキョククジラを、ボートキャプテンとその妻、および5 人から20 人ほどの乗組員（クルー）から構成される捕鯨ボート組が社会単位となって捕獲している。現在のバロー村には、そのような捕鯨ボート組が55 ほど存在し、捕鯨に成功したボート組のキャプテンとその妻はクジラの肉や脂皮をさまざまな機会に分配するので、家族や親族、そのほかの村人の間に流通し、消費されている。

これまでの調査によれば、次のような分配が実施されている。

(a)ホッキョククジラの捕獲に成功したボートキャプテンと乗組員の間での規則に則った獲物の分配。

(b)ホッキョククジラを解体場所まで曳航するのを補助し、解体の手助けをしたほかのボートキャプテンや乗組員への規則に則った獲物の分配。

(c)解体の場所に集まってきた村人にボートキャプテンの妻は大釜で煮た脂皮（マッタック）を振舞う。

(d)解体とおもな分配の作業が終了すると、残った肉や脂肪部を村の女性が切り取って自宅に持ち帰る。このような形でボートキャプテンが肉や脂肪を分配することをピラニアック(pilaniaq)という。

(e)捕獲に成功したボートキャプテンは、捕獲の翌日に自宅の前に旗を立て、村人を食事にまねき、食物を提供している。さらに彼とその妻は、家族や親族、村の古老や寡婦にも肉や脂皮を分配する。

(f)捕鯨シーズンの終了時に、最後のホッキョククジラを捕獲したボートキャプテンがボートを揚げる海岸に旗を立て、そこに来たすべての人に鯨肉、脂皮、発酵肉などを振舞う。このイベントは、アプガウティ(apugauti)と呼ばれている。

(g)ホッキョククジラの捕獲に成功したボートキャプテンとその妻は、(11 月の第4 木曜日の)感謝祭やクリスマス、ナルカタック（ブランケット・トス）祭、使者祭のために肉や内臓の一部を貯蔵しておき、それらの時の饗宴(共食)を通して村人全員に肉、内臓、マッタック、脂肪を振舞う。

(h)さらに肉やマッタックの一部は、アンカレッジやアナクトヴク・パスなどのほかの場所に住む家族や親族に送られる。

このように時差のある分配を繰り返すことによって、ホッキョククジラの肉や脂皮はたとえ少量であってもすべての村人そしてほかの所に住む家族や親族の口に入ることになる。

今回の報告では、2009 年6 月にバロー村で開催されたあるボートキャプテンのアプガウティの事例として、準備や食物分配について報告し、この祭りのもつ社会的、経済的、文化的な効果について検討を加える。

アプガウティは、捕鯨ボート組のボートキャプテンとその妻が乗組員の家族とともに準備し、実施する社会的な活動であり、かつ村人全員が参加することができる饗宴を伴う捕鯨祭りである。参加者一人当たりが手に入れる鯨肉や脂皮、発酵肉(ミキガック)は、1～2食分と多くはないが、文化的に価値の高い食べ物を得られる機会である。この饗宴に参加し、鯨肉や脂皮を食べることは、イヌピアックとしてのアイデンティティを確認する機会となっている。さらに、饗宴の内容や規模によって村人がボートキャプテンとその妻の社会的な評価を決定する場でもある。したがって、報告者は、現在のバロー村のアプガウティにおける食物分配は経済的な効果には乏しいが、既存の社会関係やイヌピアック・アイデンティティ、ボートキャプテンとその妻の社会的な地位の再生産と深くかかわっていると主張する。

【 先住民生存捕鯨、アラスカ、イヌピアック、祭り、食物分配 】